HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第二言語習得における日本語と韓国語の目的語を標示する格の学習困難度の研究 ： 有標性と他動性によるアプローチ［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	村山, 友里枝
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第13980号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78334
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yurie_Murayama_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：村山　友里枝

審査委員
主査　教授　河　合　　靖
副査　特任教授　大　野　公　裕
副査　准教授　平　田　未　季
副査　名誉教授　上　田　雅　信

学位論文題名

第二言語習得における日本語と韓国語の目的語を標示する格の学習困難度の研究
―有標性と他動性によるアプローチ―

学習困難度の研究は、Lado (1957)に始まる「対照分析仮説(Contrastive Analysis Hypothesis, CAH)」から、Eckman(1977)の「有標性差異仮説(Markedness Differential Hypothesis, MDH)」を経て、Eckman(1991)の「構造的一致の仮説(Structural Conformity Hypothesis, SCH)」へと発展した。この研究の発展の流れの中で「有標性(Markedness)」は重要な役割を果たしてきた。しかし、これらの研究は、その研究領域が主に音韻論に限られていること、目標言語を英語とするものが大半であったこと、「有標性」の概念が曖昧であることなどの問題があった。そこで、本研究では、二項動詞の目的語の格標示という統語論の領域の学習困難度を対象とし、英語以外の言語である日本語と韓国語を目標言語として、頻度概念に基づく有標性の概念を用いて二項動詞の目的語の格標示（対格と与格）の学習困難度の仮説を提案し、韓国人日本語学習者のコーパス(「タグ付きKYコーパス」および「C-JAS(Corpus of Japanese as a Second language)」)及び日本人韓国語学習者のコーパス(「KC Corpus」)のデータ分析に基づいて仮説を検証した。その結果、予測が経験的に裏付けられることが示唆された。しかし、同時に有標性の概念のみでは学習困難度を明らかにする上で不十分であることも明らかになった。

実際に、これまで格標示の学習困難度には、動詞の「他動性(transitivity)」が関わっているという主張をしている蘇（2007）などの研究がある。そこで、他動性が格標示の学習困難度にどのような影響を与えているかについて明らかにするために、Hopper and Thompson(1980)及び角田(1991/2009)の他動性の概念に基づいて、個々の文の他動性の程度を数値化した上で、他動性と動詞の頻度に基づく仮説を提案した。そして、その予測を学習者コーパス（C-JAS）により検証し、予測の一部が経験的に裏付けられることを示唆した。しかし一方で、馴染み度など、その他の幾つかの要因が関わっていることも示唆される結果となった。

最後に、Haspelmath(2015)の「他動性卓越(transitivity prominence)」の概念を用れば、有標性の概念を他動性の統語的な特徴として取り込むことによって、有標性と他動性を 1 つの仮説に統合することができる可能性があることを論じた。

口頭試問は 2020 年 1 月 10 日 13 時から約 1 時間 30 分にわたって行われた。まず、博士論文提出者が約 30 分間論文の内容についての発表を行った。次に、審査委員及び参加者との間で約 40 分間の質疑応答が行われた。その後、約 20 分間審査委員のみで研究の意義、方法論などの観点から本論文の審査を行った。

審査の結果、審査委員は、次の 3 つの点で本論文を高く評価し、その意義を認めるものである。まず、第一に、本論文は、学習困難度の研究の新しい方向性を示すものであり、今後当該の研究テーマで研究を進める上で，大きな一歩になっていると判断する。第二に、複雑に入り組んだ先行研究を詳細に分析、整理しており、論文全体が精緻に構成され緻密な論考が行われていると評価する。第三に、有標性と他動性の概念を明確にした上で、この 2 つの概念に基づく学習困難度の仮説を提案しているだけではなく、他動性卓越という概念を用いてこの 2 つを統合する試みも行っている点に独自性を認める。

一方、問題点としては、次の 3 点が指摘された。まず、第一に、検証に用いた学習者コーパスの規模が限られているので、仮説が十分に経験的に検証されているとは言えない。第二に、第一の問題と関連しているが、博士論文提出者も指摘しているように、仮説を検証する方法として学習者コーパスのデータの分析のみでは限界があり、タスクを用いたテストなど他の検証の方法を補う必要がある。第三に、頻度による有標性という概念と学習者が経験するインプットとの関係についての議論が十分とは言えない。

これらの問題は残されているものの、上記のような観点から本論文は高い学術的意義を持つ。よって、審査委員会では本論文を、博士（学術）の学位を授与される資格があるものと判断した。